一般社団法人

東洋音楽学会 沖縄支部通信 NO.49 （2024 年 3 月 31 日発行）

Newsletter of the Okinawa Chapter, Society for Research in Asiatic Music

発　行：（一社）東洋音楽学会 沖縄支部
事務局：〒903-8602　沖縄県那覇市首里当蔵町 1-4
沖縄県立芸術大学音楽学部　小西研究室気付
http://tog.a.la9.jp/okinawa/index.html
MAIL: okinawashibu.toyo@gmail.com

【第 81 回定例研究会記録】

日時：2024 年 2 月 18 日（日）14:00〜15:45
オンライン開催（Web 会議ツール Zoom）

■発表内容

対談
「演奏家と母語〜日本語を母語とするクラシック音楽家がめざす 21 世紀の地平〜」

【登壇者】
報告者：渡久地圭（ビューロー・ダンケ代表、フルート奏者）
コメンテーター：浜田理恵（オペラ歌手、新国立劇場オペラ研修所ヴォーカルテクニカルコーチ）
司会・聞き手：三島わかな（沖縄支部委員）

■企画主旨

東洋音楽学会沖縄支部第 81 回例会の企画の主旨は、以下の二点にあります。

そのひとつは、日本語を話者とするクラシック音楽家が、いかにして西欧諸国の言語（イタリア語・フランス語などのラテン語系諸語、英語・ドイツ語などのゲルマン語系諸語）と、日本語の特性との間に介在するギャップ（母音と子音の関係）をどのように認識し、理解し、乗り越えて表現するか、について考えることです。

より広義には、歌詞（コトバ）のある歌曲作品の演奏にとどまらず、歌詞（コトバ）をもたない器楽作品の演奏においても、イントネーションやリズム等の表現面において、作曲家それぞれの母語の特性とその音楽表現のあいだには、密接な（切り離せない）関係があると考えられるでしょう。

ふたつには、「西洋クラシック音楽」をとりまく環境について考えた時、いまや世界的な広がりをもつ文化状況が広がっています。例えるならば、世界の共通言語と化した「英語」のような様相を呈しているのではないでしょうか。このように、西洋クラシック音楽がひろく普及した結果として、西洋クラシック音楽はその本拠地の「西ヨーロッパの人びと」に限定されることなく、多様な文化背景の人びとよって共有される時代にあると言えます。そのように考えたとき、「日本語話者が表現するクラシック音楽のスタイル」が確立し、そして認知される時代がやって来る可能性もあるでしょう。

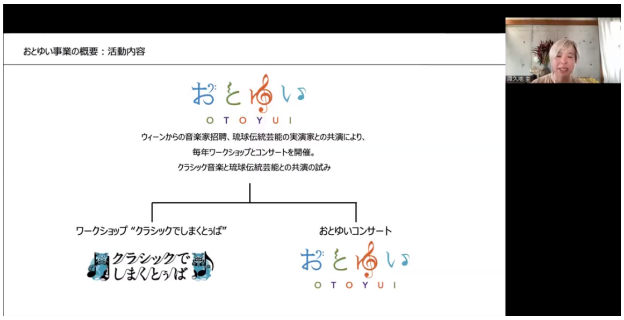
さらに踏み込んで言えば、日本語ひとつとっても、日本国内の地域的多様性（お国言葉）があります。一例として沖縄の言語状況でいえば「沖縄諸語」（沖縄本島、宮古諸島、八重山諸島）の間でもコトバに違いがありますし、そのことは沖縄

内の各地域の伝統芸能における表現の多様性にも繋がっていると言えるでしょう。

本企画では、クラシック音楽表現とコトバ（母語）の関係について考えるだけにとどまらず、伝統芸能の表現（それぞれの伝統芸能の土壌の外で育った実演家）においても相通じる今日的な問題について、今一度、みずからの立ち位置をとらえ直し、考え深める機会になれば幸いです。

なお、今回の例会はリモート形態で開催したため、対面開催では不可能なことがいくつか実現できました。そのひとつは、コメントいただいた浜田理恵氏（在仏、トゥールーズ在住）のご登壇です。そして、沖縄支部会員のみならず東日本支部ならびに西日本支部の会員のみなさまの参加をはじめ、「二期会フランス歌曲研究会」の会員の皆様（フランス在住）もご参加くださいました。このように、支部の垣根そして国内外の垣根を越えた画期的な開催となりました。いまや、コロナ禍の置き土産として定着しつつあるリモート開催だからこそのメリットを、存分に感じる機会となりました。

（文責：三島わかな）



（写真：第 81 回定例研究会）

■傍聴記

本報告の主な報告者は沖縄出身のフルート奏者でありビューローダンケ代表の渡久地圭氏である。演奏者が自身の文化的コンテクストにない音楽を演奏する際、言語や身体性などの相違点をどう捉え取り組むべきなのか、特に非西洋人が西洋音楽を演奏する場合を中心に据え、渡久地氏が活動を通して得た知見と実例を挙げながら報告した。

まず渡久地氏によりビューローダンケの活動趣旨が述べられた。ビューローダンケとは 2013 年に渡久地氏が仲間らと共に設立した「芸術と共に過ごす、充実した時間」を提供する企画制作チームである。渡久地氏はデトモルト音楽大学（ドイツ）に 4 年間、その後ウィーンに 2 年間留学しており、帰国後もウィーンとの行き来が続いている。

続いて渡久地氏が 2022 年度および 2023 年度に主宰した「おとゆい」というプロジェクトについて概説した。このプロジェクトは西洋音楽と琉球伝統芸能との共演を試みるものであり、ワークショップ「クラシックでしまくとぅば」とワークショップで得たものを発信する場として「おとゆいコンサート」を開催している。

この後、演奏者がいわばルーツの垣根をどう乗り越え演奏をするか、試行錯誤している実例が三つ、映像を用いて紹介された。2022 年度にワークショップ内で行われたウィーン在住のテノール歌手、ライナー・トロスト氏と「おとゆい」の芸術監督である三ツ石潤司氏の対談と、トゥールーズ在住のソプラノ歌手浜田理恵氏による欧州言語を非母語とする歌い手への欧州言語の発声および歌唱表現の指導風景、そして京都出身の琉球音楽演奏家和田信一氏による琉歌の歌唱技術の習得過程における言葉の響きの捉え方に関する所見を述べたものである。いずれにおいてもただ真似をするだけでは演奏として不十分であり、演奏者自身が作品に対し、言語や身体性などの違いを踏まえながら自分から理解を深め肉薄していくことが大切であることが示された。これらの映像資料は現在活躍している演奏者による発言ということもあり説得力を強く伴っていた。特に浜田氏の映像は、非西洋人が西洋音楽を演奏するというある種のねじれが言語や身体性からくる問題をはらんでおり、ねじれを解消するためにはいかに歌い手が努力すべきか、その一例を明示したものである。明治政府の政策として西洋音楽が日本に導入され、一世

紀半近い歳月が流れる現代においても、日本人が西洋音楽を演奏するために越えるべき山はまだ大きいのだと感じた。

また、今回は企画者としての立場から意見を述べていたが、沖縄出身のフルート奏者という立場から、渡久地氏自身が西洋音楽を演奏することにどのような考えを持っているのかという点に興味を覚えた。自身の企画とフルート奏者としての考えとのかかわりについて述べることで、本報告のタイトルに渡久地氏自身が多面的に対峙していることが明確になったように思われる。

参集者からは西洋音楽と琉球音楽とをつなげることについて、そして今後の展望についての質問が出た。始まったばかりのプロジェクトだが、今後の発展と充実を祈念する。

（報告：中津川祥子　※東日本支部会員）

――お知らせ――

❶研究発表の募集と締切日について

エントリー締切日：2024 年 5 月 15 日（水）

※研究発表は、なるべく事務局へメールでご応募ください。郵送の場合は同日必着です。

東洋音楽学会沖縄支部メールアドレス
Okinawashibu.toyo@gmail.com

注）5 月 15 日締切の公募にエントリーなさった応募者の発表につきましては、第 82 回例会（2024 年 7 月中旬頃）での発表予定ですが、応募状況によっては、第 83 回例会（2025 年 2 月頃予定）での発表となる可能性をお含みおきください。

❷第 82 回例会情報

開催日時、発表等の仮タイトルにつきましては、2024 年 6 月中旬を目途にご案内さしあげる予定です。

（一社）東洋音楽学会 沖縄支部通信 No. 49 編集委員
小川恵祐、高瀬澄子、多和田真理
塚原健太、三島わかな
次号 No. 50 は 2024 年 8 月に発行予定